

ある。大に注目せられてよい本であると思ふ。

なほ、これは文部省推薦圖書になつてゐる。

(B6判二一頁 圖一葉 昭和十六年十二月三 省堂發行 壹圓
四拾錢) (藤枝晃)

印度支那 邦人發展の研究 に於ける

——古地圖に印されたる日本河に就いて——

杉本直治 郎 共著
金永鍵

西曆十七世紀の前半より以來、當時南洋に在て活躍中のオランダ人の諸記録が、又之に續く西歐人作成になる諸地圖が、一樣に印度支那を縱斷する第一の大河、メコン河の下流に對して日本河の名稱を適用してゐた、此の事實こそは現存する遺迹の數多からぬ中に在て、獨り近世初期に於ける邦人の目覺しい南洋發展を物語る有力な資料でなくて何であらうか。日本河の研究、其は一見極めて特殊な取題ではあり乍ら、實は其の背後に見出さるべきかゝる重大なる問題との關係に於て、確に重要な研究と云はねばならない。

大東亞戰下、吾が國の關心が南方の現實に對して異常な熱度を以て注がれてゐる今日、此の問題をとり上げた本書が世に出されるに至つたのは、正しく其の時を得たものと云ひうべきであらう。

著者杉本直治郎氏に就ては、事新らしく紹介する迄もなく、廣島文理科大學に在つて永年の專攻により吾が國印度支那史の權威であり、金永鍵氏亦職をハノイの遠東學院に奉じ其の間同じき分野に探求の歩を進められた専門の士である。此の兩氏が期せずして、目下の情勢に相應しい南洋に於ける邦人の發展に關する資料を刊行するの舉を企て、緊密なる協力の下に、ものせられたのが本書であつてみれば、讀者は自ら本書に特別の期待をかけられて然るべきである。そして此の期待は、日本河の研究と題する第一篇及び日本河の地圖として掲げられた圖版集第二篇を仔細に披讀さるゝ時、確かに十二分に満足されるであらう。蓋し時局向きの一般出版物に往々にして認められる空疎な内容に引かへて、本書は其の前篇を精密なる學術的考究に當て、後篇亦貴重な根本的資料の集成を以て形成されてゐるからである。

第一篇研究篇は四章に分れる。即ち日本河の稱呼を今日に傳へる最古の文獻、十七世紀初頭のオランダ人の記録より以下文書に存するもの十數種、同じく十七世紀オランダ人の作成に係る古地圖十數種を擧げて之を分類圖示し、其の使用字面の差異誤謬を比較校訂し、其等が何れも紛ふことなきメコン下流を指し示す日本河の稱呼なる點を明かにして第一章・第二章は結ばれてゐる。續いて其の名稱に該當すべき河流を比定するに充てられた第三章には、當時のオランダ人旅行記其他に依據して之を現今メコン河河口の最北流をブノン・ベン附近に迄遡る延長約百七十哩の河流に考證し、最後に日本河の起源を説いては、其が十六世紀以來既

に此の地に出現を見てゐた日本人町の成立に伴ふ現象なりとして十七世紀初頭の文獻に初出する所以を説明し、以後前後三世紀二百年間に亙る此の名稱の存続理由に併せ及んでゐる。第二篇資料篇に載せられたイサーク・ド・フラーフ「カムボジア及び附近圖」より以下十六葉を算する豊富な古地圖の寫眞版と合せて、日本河の全貌は之を述べて遺憾なきものと云ふべきである。

嘗ての先人の活躍の迹、僅かに零細な文獻に其の面影を残すに止め再び忘却の陰裡に埋もり去りたるやの隈ありし東南アジアの史蹟を、今にかくの如くに確實に考證せられたことは、南方史研究其の物、若しくは之に對する興味と關心とを惹起せしむる上に其の功少なからざるは姑く言はずとするも、新しき時局の進展に一個の回想點を提出せられた、唯これ丈を以てするも十分江湖に推賞さるべき資格を持つであらう。

(四六版 本文三十三頁 圖版二十一 地圖一葉 富山房發行
定價參圓五拾錢) (愛宕)

現代史學

大類 伸著

未曾有の世界轉換期に生を享けた我々——しかもかゝる世界史的時期に歴史の學を専門の業として選んでゐる我々にとつて、史學が現代に於いて如何にあるべきかを考へることは、單に専門の學の内部的必要から生れて來た原理的な課題であるにとどまらな

い。それは必然的に、我々が歴史の學徒として現代を如何に生き抜くべきかといふこととも關聯せざるを得ないが故に、歴史學が現代に於いてあるべき姿を考へる事は、我々の全存在にかけられた現實的實踐的な問題——しかし同時に我々の生そのものにつけられた内面的問題でもあらねばならない。特に從來我國史學界に於ける歴史理論及び史學思想方面に於いて西洋史學が有して來た特殊な意味を思ひあはすと、今日我國西洋史學徒に課せられた任務のいよいよ重いことが、痛感されずにはゐられないのである。かかる意味に於いて、我國西洋史學の泰斗大類伸博士が最近十餘年間に發表された舊稿に更に推敲を加へられて、補筆改訂の上、「現代史學」と題して一書を刊行されたことは、その意義決して渺しとしないのである。

然しながら、歴史學が如何にあるべきかを考へるためには、先づそれが近き過去に於いて如何にあつたか、そして現代に於いて如何にあるかを省みねばならないであらう。過去を背負つた現代を先づ眞に理解し得てこそ、始めて未來に於いて行くべき道が開開されるといふべきである。それ故、本書の一部もまた近き過去への回顧に宛てられねばならなかつた。即ち、全部で七篇收録されてゐる論稿のうち、その第七「本邦に於ける西洋史學の發達」と第二「西洋歴史思想の性格」とがさやうな意味をもつてゐることは勿論、更に第三「政治史と文化史」、第四「現代歴史觀と精神史」及び第六「最近西洋史界の動向」のそれぞれが、少なからざる部分を歴史的回顧のために割いてゐるのである。尤も後の三者に於いて